

オレーシャとスターリン 「人間の魂の技師」の起源をめぐって (A Retrospect)

沼野充義

1. スターリンはオレーシャを「剽窃」したのか？

——ボーレフのスターリン神話

スターリンが言ったとされ、一種の格言や名句 *крылатые слова* になった表現は数多い。旧ソ連時代の殆ど唯一の信頼できる「名句事典」だったアシューキナ、アシューキナ編による«Крылатые слова» (第3版, 1966年)¹を見ても、スターリンの名句は6点収録されているし、もっと新しい、現代の引用句蒐集の第一人者であるドゥシェンコ編の、編纂作業の手間を考えると気が遠くなるような労作『現代引用句事典』²には、スターリン自身が言ったり書いたりしたものと、俗に彼に帰されるものを合わせてなんと88点も収録されている。その中には「一人の死は悲劇だが、数百万の死は統計だ」という言葉も収録されているが、これはドゥシェンコ自身が「典拠不明」としている通り、いくらスターリンでもこのようなことを公的に言ったり書いたりするわけがない。「あのスターリンならばこのくらいのことを言ってもおかしくはない」という、人々がスターリンについて抱いた「期待の地平」に支えられた一種のスターリン・フォークロアと考えるべきだろう。悲劇と統計をめぐり、スターリンにしばしば帰されるこの箴言の起源については、以前、別のところにエッセイを書いて検討したことがあるが、³ここではそれと並ぶもう一つの有名なスターリンの言葉「人間の魂の技師」をとりあげてその起源について考えてみたい。これは「一人の死は……」とは違って、スターリンが言った言葉だということについてはっきりとした根拠がある。しかし、スターリンがどこからそんな表現を思いついたのかについては諸説あり、明らかに不正確な説明も流布しているので、改めて検証する必要がある。

¹ Ашукин Н. С., М. Г. Ашукина. Крылатые слова. Литературные цитаты. Образные выражения. 3-е изд. М.: Художественная литература, 1966.

² Душенко К. И. Словарь современных цитат. 4-е издание, исправленное и дополненное. М.: Эксмо, 2006.

³ 沼野充義「悲劇と統計——スターリンは本当にそんなことを言ったのか？」『れにくさ』第2号(2010), 12-18 ページ。

私自身は修士論文（東京大学大学院人文科学研究科に提出、1979年12月）でユーリイ・オレーシャを取り上げ、その時点で入手可能だったオレーシャの著作はすべて読んでいたので、彼の短編の一つ「人間の素材」«Человеческий материал»という作品（1929年）もよく知っていた。この作品でオレーシャは、作家を「人間の素材の技師」инженер человеческого материала と規定している。スターリンの名句との相似は明らかなので、多分スターリンはオレーシャのこの表現をもとに「人間の魂の技師」という言い方を発案したのではないかと、修士課程2年の私はおぼろげながら想像した。しかし、オレーシャは当時活躍し始めていた新進気鋭の作家であったとはいえ、スターリンがわざわざそんな若手の作品を読んでその表現を「引用」というのも腑に落ちない、そもそもオレーシャは共産主義者たちからかなり厳しい批判を受けていた。「同伴者」作家であり、「人間の素材」も一読すれば分るとおり、社会主義時代の作家のあるべき姿を肯定的に謳いあげた作品などとは言い難い。そのうえよく考えてみるとオレーシャは人間の「素材 material」すなわち物質を言っているのに対して、スターリンは「魂」である。「人間の～の技師」という同じパターンの表現ではあるとはいえ、方向が正反対ではないか。そう考えると、オレーシャ⇒スターリンという直接の関係はどうも成り立ちにくいのではないかと.....といったところまで、40年以上昔の私は思いを巡らせたのだが、結局そんな「ヒマ人の疑問」праздный вопрос にいつまでも頭を悩ましてもらえず、そのうち忘れてしまったのだ。

その後、この問題について深く考えることはなかったのだが、2003年に出版された岩本和久の『沈黙と夢——作家オレーシャとソヴィエト文学』の第5章「人間の素材」が優れた概観を与えているので、あえてそれに付け加えることもあまりないと思っていた。岩本はここで、ソヴィエト初期において展開した「新しい人間」の創出や、精神まで含めた「人間改造」といった思潮の流れを整理し、心理学者ベフテレフ、プロレタリア文学者ガスチェフ、レフの詩人・理論家セルゲイ・トレチャコフなどの主張を参照軸として示しながら、作家の仕事を技師のそれと同一視するような考え方が革命直後のソ連にかなり広く見られ、「人間の素材の技師」というオレーシャの言葉もその流れの中にあり、「やがてスターリンによって定式化された」とまとめている。⁴ 岩本はスターリンが直接オレーシャの言葉を参照した可能性があるかどうかについては踏み込んでいないが、ロシアや欧米の研究者によって示唆されてきた文化的コンテクストはほぼおさえている。

⁴ 岩本和久『沈黙と夢——作家オレーシャとソヴィエト文学』群像社、2003年、第6章「人間の素材」、133-166 ページ(特に 135-137 ページ、158-159 ページ)。

この問題を改めて少し考えてみようと思ったのは、最初に疑問を抱いてから殆ど40年後、東京大学からの定年退職を目前にした頃、ソロモン・ヴォルコフの『ロシア文化全史——政治と芸術の十字路で』（今村朗訳、沼野充義解説、河出書房新社、2019年）⁵を読んだときのことである。この本の日本語版の解説を依頼されたため、訳文を校正の段階でロシア語原文と照らし合わせながら丁寧に通読したのだが、この本の中でも、スターリンが作家たちとのある会合で「人間の魂の技師」という言葉を使ったということが言わば文化史的事実として記録されていることに目が留まった（上掲翻訳書183ページ）。そこで、この言葉の起源に関して40年前に私が抱いた疑問はいまどう解決されているのかが気になって、とりあえずインターネットで検索すると、この名句を解説したページは数えきれないほど出てくるのだが、その大部分がスターリンの言葉はオレーシャから直接来ていると説明していることが分って驚いた。

いったいどこからこの短絡的な（後で論ずるように、恐らく間違っている）情報が出ているのかとネット上をあちこち閲覧していると、その源泉はユーリイ・ボーレフのスターリンに関する逸話集《Сталиниада》だということが分った。すべての誤った情報がここから来ているのだとすると、いかにボーレフの著作が「信じるもよし、信じないもよし」⁶というスターリンをめぐる信憑性のはっきりしない逸話集ないしはフォークロア集であるにせよ、罪は重いと云わざるを得ない。いや、ボーレフに罪はないかもしれない。きちんと文献に当たって典拠を探るドゥシェンコの目には、このボーレフの一口話は「純然たる伝説」легенда чистой воды⁷（つまり「真っ赤なウソ」）であることは明らかなのだが、これを事実と勘違いした人々がネット上で安易に拡散してしまったようだ。

まず、ボーレフの《Сталиниада》において、この件がどのように書かれているか、確認しておこう。

剽窃 ヴィクトル・シクロフスキーが1971年5月にペレジェールキノで話してくれたのだが、「作家は人間の魂の技師である」というアフォリズムはゴーリキイの家でスターリンが作家たちと会合を行ったときにオレーシャが言ったものだという。その後スターリンはこの公式を引用する際に、礼儀正しく（沼野注—

⁵ ロシア語原書は *Соломон Волков, История русской культуры XX века от Льва Толстого до Александра Солженицына. М.: Эксмо, 2008.*

⁶ ユーリイ・ボーレフ『スターリンという神話』亀山郁夫訳、岩波書店、1997年、299ページ（亀山郁夫による「訳者あとがき」より）。

⁷ *Душенко К. И. История знаменитых цитат. Москва: КоЛибри, 2018. С. 195.*

ここで「礼儀正しく」は「出典を明らかにして」の含意がある) こんな風に言った——「同志オレーシャが的確に表現したように、作家は人間の魂の技師である」。やがてこの箴言はスターリンが考案したものとされ、彼はそれを謹んで受け入れたのだった。⁸

ボーレフはここで、シクロフスキーから 1971 年に聞いた話を記しているわけだが、ここで問題になっている格言が最初に発せられてから 40 年近くも後の伝聞情報である。シクロフスキーの記憶が正確であるという保証もないし、確かめようにも当のオレーシャは既に亡くなっている (オレーシャは 1960 年没)。そこで今日知られているソ連文学史上の事実として、ゴーリキイの家で行われたソ連作家たちとスターリンの会合とはどんなものだったのか、再確認することから始めなければならない。

2. ゴーリキイ邸の夜—ゼリンスキーの回想から

ここで言う会合とは、1932 年 10 月 26 日にモスクワのマーラヤ・ニキーツカヤ通りのゴーリキイ邸で行われたものである (ゴーリキイ邸とは、モダニズム建築の代表者、フョードル・シェフチェリによって設計された斬新なデザインの家で、現在はゴーリキイ記念博物館となっている)。この会合はスターリン自身を始めとする政府幹部と主要な作家たちが一堂に会するという極めて重要な機会であったにもかかわらず、公式の記録が残されていない。それにもかかわらずこの会合の一部始終、とりわけスターリンの発言をわれわれが知ることができるのは、この会合に出席していた文芸理論家・批評家のコルネリー・ゼリンスキー (1896—1970) のおかげである。彼がこの会合について残した詳細な記録は、未公刊の原稿のままモスクワの РГАЛИ (ロシア国立文学芸術アーカイヴ) に眠っていたが、1990 年に歴史文集『過去』の第 10 号⁹に掲載

⁸ *Борев Юрий*. Сталиниада, М.: Советский писатель, 1990. ただしインターネット上の «Электронная библиотека RoyalLib.com» というサイトで閲覧した (2020 年 5 月 31 日閲覧) : https://royallib.com/book/borev_yuriy/staliniada.html. «Сталиниада» はこの 1990 年ソヴェツキー・ピサーチェリ社版が初版である。筆者が所蔵しているのは 2003 年オリンプ社版だけだが、そこで同じ項目を見ると、冒頭の「1971 年 5 月にペレジェールキノで」という部分が欠けている。単なる校正ミスなのかもしれないが、ボーレフ自身が不確かな記憶に基づく誤った情報として後で削除した可能性も否定できない。 *Борев Юрий*. Сталиниада. Москва: Олимп, 2003. С. 100-101. なお、この項目は亀山郁夫訳前掲書『スターリンという神話』にも訳出されている (84 ページ)。

⁹ *Зелинский, К.* Вечер у Горького (26 октября 1932 года). Публикация Е. Прицкера // *Минувшее. Исторический альманах*. 10. Paris: Atheneum, 1990. С. 88-117. この回想は翌年、モスクワの『文学の諸問題』にも別の校訂者によって発表されている。この両者は基本的には同じも

されて一般の知るところとなった。一読して驚かされるのは、当日の参加者の顔ぶれから、主な発言まで、すべてが丹念に記録されていることで、すぐに「こんな大量の情報に正確に記憶できるものだろうか？」という疑問が湧くほどである。

ゼリンスキーは 1920 年代後半には構成主義の理論家として活躍していたが、おそらくこの重要な会合にソ連の文壇の代表者として招待されるほど著名な存在だったとは思えない。ただ彼はゴーリキイやエルミーロフが主導していた出版プロジェクトの参加者であり、その縁で招待されたようである。だからこそ、スターリンを筆頭としたソ連政府首脳たち（モロトフ、ヴォロシーロフ、カガノヴィチ、ポストイシエフ）や共産党政権を支持し、今後のソ連文学を発展させえていくべき主要な作家・批評家・出版者たちが一堂に会するという歴史的場面に自らも参加しているということに感動し、その晩に行われ、話されたことを必死に全部記憶しようと努めたのではないだろうか。彼自身が添えた注記¹⁰によれば、この会合に招かれたのは、ホスト役のゴーリキイや政府首脳は別として、フセヴォロド・イワノフ、カタールエフ、レオーノフ、セイフーリナ、アヴェルバフ、アフィノゲーノフ、マルシャーク、ユーリイ・ゲルマン、グロンスキー、リベジンスキー、オグニョフ、ショーロホフ、ルゴフスコイ、ザズブーリン、ニクーリン、グラトコフなど総勢 43 名にのぼる。ここにはオレーシャも、シクロフスキーも入っていない点に留意していただきたい。彼らはこの歴史的会合には呼ばれていなかったのである。

1932 年はソ連文学が、スターリン体制のもと、共産主義政権を支持する作家たちの単一のソ連作家同盟に再編成されつつある決定的に重要な時期だった。それまで文壇で圧倒的な勢力を持ち、他の流派に対して攻撃的に振る舞っていたラップ（РАПП、ロシア・プロレタリア作家協会）は 1932 年 4 月、共産党の決定により解散させられ、ソ連作家たちは共産党の一元的支配の下、「ソ連作家同盟」という単一の組織に組み込まれることとなり、そのためにゴーリキイを議長、イワン・グロンスキーを第一副議長とする組織委員会が作られた。同時に「社会主義リアリズム」という今後のソ連文学を長年にわたって支配する公式ドクトリンも準備されていた（グロンスキーが初めてこの言葉を公に使ったのが 1932 年 5 月のことである）。

そんな時期にゴーリキイがホストとなり、スターリンが自ら出席した会合であるだけに、目的ははっきりしていた。共産党の指導のもとに文学界を再編成し、社会主義

のだが、細部には異動があるので注意を要する。*Зелинский, К.* Одна встреча у Горького (Запись из дневника). Публикация Л. Зелинского // Вопросы литературы, 1991. № 5. С. 144-170.

¹⁰ *Зелинский, К.* Одна встреча у Горького. // Вопросы литературы, 1991. № 5. С. 145.

リアリズムの教義のもとに作家たちを束ねていくための準備である。当時の文壇情勢、特にそれまで猛威をふるい「過ち」を批判されて解散させられたラップのメンバーの処遇をめぐる、かなり生々しい議論も行われた。じつはアヴェルバフ、エルミーロフ、マカエリエフの3名の元ラップのメンバーを新しく創設されるソ連作家同盟の組織委員会に入れたのはゴーリキイの計らいによるものであり、10月26日の会合の招待者リストも最初は共産党員作家を中心にアヴェルバフとエルミーロフが作成し、面倒な発言をしそうなセイフーリナなどは最初の招待者リストからは意図的にはずされていた、とゼリンスキーは書いている。しかし、その後リストは「最高レベル」が閲覧して、セイフーリナなど非党員作家も加えられたのだという。¹¹ アヴェルバフやエルミーロフの危惧的中し、会合ではゴーリキイの真正面に座っていたセイフーリナが議論の口火を切り、元ラップのメンバーが3人も作家同盟組織委員会に入ったことを猛批判し、自分は「反革命」と呼ばれてもかまわない、しかし自分の意見を言うことを恐れないと言い放った。セイフーリナ自身、それまでラップの理不尽な攻撃に苦しめられてきたのだが、それにしてもスターリンの目の前で、当のラップの元メンバーが同席する中で、驚嘆すべき勇氣ある言動ではないか。こういったソヴィエト文学史上稀に見る劇的な場面も、ゼリンスキーのおかげで我々は知ることができる。

しかしこの晩は、元ラップのメンバーの処遇といった個別の問題を超えて、スターリンの指導の下に建設されつつあるソ連において作家はどんな存在であるべきか、ということが検討されるべき最も重要な問題だった。そして、スターリン自身がまさにこのことについて、会合が終わりに近くなってから、弁舌をふるったのである。ゼリンスキーの回想から、その箇所を引用してみよう。

「(……) もう一つ諸君に言うことを忘れていた。諸君が生産しているものについて言いたかったのだ」

ここでスターリンはまた別人のようになった。宴席の幹事のように、ワイングラスを持って、宴席のスピーチを始めたのだ。彼は生き生きとし、出席していたすべての作家たちが四方八方から群れをなして彼を取り囲んだ。

「生産といってもいろいろなものがある。大砲、自動車、機械。諸君も商品を生産している。それは我々にとって非常に重要で、興味深い商品——人間の魂だ」

¹¹ *Зелинский, К.* Вечер у Горького (26 октября 1932 года). Публикация Е. Прицкера // *Минувшее. Исторический альманах*. 10. Paris: Atheneum, 1990. С. 92, 95. なおこの興味深い記述は、『文学の諸問題』1991年5号に掲載された回想にはない。

そのときこの「商品」という言葉にびっくりしたのを、私は覚えている。

「そう、これも重要な生産品だ。人間の魂というのも非常に重要な生産品だ」

(.....)

「我が国のすべての生産は、諸君が生産するものと結びついている。そしてその生産は、人がどのように社会主義の生産に加わり、参加しているのか、知らなくては、それなしには不可能だ (.....)」

「(.....) 人間は生活そのものの中で作り変えられていく。しかし諸君もまた人間の魂の改造を助けなければならない。大事な生産品だ——人間の魂というものは。そして君たちは人間の魂の技師なのだ。だからこそ作家たちのために、そして中でも一番謙虚な作家である同志ショールホフのために乾杯しよう！」¹²

一読して分かるように、人間の魂を工業生産品と同列に扱い、それを製造する（あるいは作り変える）のが社会主義建設を進める国における作家の仕事だという、過激な見解の表現である。人間の魂が商品、生産物であるというのは、一種の比喩のようでいて、作家たちに対して有無を言わせない強制力を持つ、「生産への指令」だった。いくらスターリンが強権によりソ連を急速に工業化し、社会主義建設を精力的に進めている時期だったとはいえ、魂を商品だという言い方は作家たちにとって予想を超えたものだっただろう。少なくともゼリンスキーはこの手記で「びっくりした」と率直に書き留めている。

3. オレーシャの「人間の素材」

ゼリンスキーの詳細な記録からもわかる通り、オレーシャはこの晩、ゴリキイ邸に招かれていなかった（招待客リストに彼の名前はないし、その後の議論の記録の中にもオレーシャは登場しない）。だからこの晩の彼の発言をスターリンが「剽窃」したということはあるまい。とはいえ、オレーシャの「人間の素材の技師」という表現はやはり、スターリンの表現によく似ている。そもそもオレーシャはどんな意味でそう言ったのだろうか。

「人間の素材」*Человеческий материал* とは、オレーシャが1929年に発表した短編小説のタイトルである。¹³初出は『イズヴェスチヤ』1929年11月7日号、つまり革命

¹² *Зелинский, К.* Вечер у Горького // Минувшее. Исторический альманах. 10. Paris: Atheneum, 1990. С. 111.

¹³ この短編には邦訳がある。ユウリー・オレーシャ（工藤正広訳）「人間の素材」『愛』、晶文社、

記念日の号なので、それに相応しいイデオロギー的負荷がかかっていたらう。いま短編小説と言ったが、これは内容を見ると全面的に自伝的なものと思われるので、ジャンルとしては自伝的エッセイと考えたほうがいい。そもそも、フィクションとエッセイの境界を行く作品がオレーシャには多かった。これはごく短い作品で、1974年に出たオレーシャの選集では、わずか3ページ半を占めるに過ぎない。

オレーシャの伝記とこの作品の内容の関係、そして「技師」が彼にとって何を意味したかについては、私が40年以上前に書いた修士論文を引っ張り出してきたので、関連箇所を引用させていただく（こんなことを書くのは我ながらおこがましいのだが、この記述はなかなか的確である。まだロシア語読解もおぼつかない駆け出しのロシア文学研究者ではあったが、未熟な若者なりによく書いている）。

11才の頃、ユーリイ・オレーシャは、オデッサのリシェリョーフスカヤ・ギムナジア（Ришельевская гимназия）に入学する。彼の学校での成績は優秀だったらしく、（注）彼には、没落貴族の父の期待がかかっていた。そのことは、彼の自伝的短編『人間の素材』（Человеческий материал）の中の、次のような一節がよく示している。

すべての結果として、理想的にうまく行った場合の人生一つまり、もしも、運命がパパに幸せになることを定めていたのならば、パパが過ごすことのできたはずの人生一の見取図が得られたのだった。しかし、人生は二度は繰り返されない。この見取図をどうすればいいのか？ それを息子に伝えるのだ。こうして、羨望やいらだちにもとづいて、ただ自分だけに固有の夢や能力を考慮に入れることによって、ぼくの父が作り上げた見取図が、ぼくを導くために提出されているわけだ。この見取図は最良のものとして提出されていて、ぼくにはそれについてとやかく言う権利はないのだ。¹⁴

ここで見のがしてならないのは、オレーシャの後の生涯にとって重要な意味をもつようになる「羨望」という概念が、このようにはるか幼年時代に由来している、という点である。「羨望」という感情は、まず第一に、新しい時代について行けなく

1971年、61-69ページ。工藤氏の独特の詩的な翻訳に20歳頃の私は魅了され、それがきっかけでオレーシャ研究にのめりこむことになった。感謝の念とともにこの訳書を思い出す。

¹⁴ Олеша Юрий, Избранное. М.: Советский писатель, 1974. С. 227. 訳文も当時の拙訳のまま。

なった没落貴族の感情として、少年時代のオレーシャの心の内に植え付けられたのであった。

ユーリイ・オレーシャは、十代の後半にまず詩人として文学活動を開始したが、それ以前の彼は、文学によりはむしろ、飛行機、自転車、サッカーなどに強い関心を示していた。彼の幼年時代は、ちょうど、航空技術の黎明期にあたり、幼い頃から、彼は、家族の中でただ一人、リリエントール、ライト兄弟、ブレリオなどの航空の初期の開拓者たちの名前に親しんでいたのである。また、伝導鎖 (цепная передача) を組み込んだ現在見られるような型の自転車が製造されるようになったのは、19世紀末のことであり、幼年時代のオレーシャにとって、自転車は憧れの的であった。そして、近代スポーツとしてのサッカーも、オレーシャの少年時代には最新の流行であり、彼はそれを観戦して楽しむだけでなく、自ら競技に参加することにも熱中していた。マヤコフスキイなどの未来派の詩人たちがオデッサを訪れた時も、オレーシャはまだサッカーに熱中しているスポーツ少年であり、彼らには興味をもたなかったという。つまり、幼・少年時代のオレーシャにとって、「世紀の青春」とは何よりもまず、近代科学技術や近代スポーツの勃興のことであり、その概念は、彼の内で、これらのものを生み出した西ヨーロッパの文化と切り離し難く結び付いていた。オレーシャのオデッサ時代の色どりは、このように極めてヨーロッパ的なものであり、ロシア的な要素は、極めて少なかった。

科学技術の勃興期にあつて、少年オレーシャは、技術者となることを期待されていたが、実際には彼の能力は技術者に向いていなかった。飛行機は、彼にとっては、見て楽しむものでしかなく、自ら製作する対象ではなかったのである。また、幼い頃、たいしてむずかしくもない船の模型を決して作り上げることができなかった、ということは、後にオレーシャ自身が回想しているところである。こうして、オレーシャは、「自然の力を扱う技術者」とはならず、「人間の素材の技術者 (инженер человеческого материала)」となるべく、文学へと向かって行く。

原注 1916年以後のオレーシャの友人であるボリス・ボボーヴィチの回想には、「オデッサのリシェリョーフスカヤ・ギムナジアを金メダルをもらって卒業したオレーシャは[.....]」という一節がある。(Борис Бобович. В сб.: Воспоминания о Юрии Олеше, 1975, стр. 23.) また、自伝的要素の極めて濃厚なオレーシャの短編『人間の素材』の主人公の少年は、「一番の生徒 (первый ученик)」として読者に示されている。(Ю. Олеша. Человеческий материал. В его кн.: Избранное. 1974, стр.227.)¹⁵

¹⁵ 沼野充義『ユーリイ・オレーシャの創作技法——世界を見る技術』修士論文, 1978年12月東

さらに、「人間の素材」は、ソ連時代に作家となったオレーシャ自身の位置づけへと続いていく。

いまあたりを見回すと、僕の周りは誰もかれもが技師だ！
家を所有している人はひとりもない——みな技師たちだ。
そして僕は彼らの中でひとり、作家だ。
そして誰も僕が技師になることを求めない。

(中略)

たとえ自然界の技師にはなれないとしても、僕は人間の素材の技師になることができる。

大げさに響くだろうか？ かまわない。僕は大声で叫ぶ——「人間の素材の再構築万歳！ すべてを包み込む新世界の技師の仕事万歳！」¹⁶

もともと幼年時代のオレーシャにおける「技師」のイメージは「家を所有し」成功した人生を歩む職業としてのそれで、むしろ小市民的な理想であって、社会主義建設に邁進する時代のソ連の技師とはかけ離れたものだった。そして 1920 年代後半に作家として華々しくデビューした後も、彼は自分を取り囲むすべての人たちが本物の「技師」であるのに対して、自分は別の存在であることを強く意識していたので、その結果、自分は「人間の素材の技師」にならばなれると（やや無理をしてでも）宣言したのである。オレーシャは決して、革命家でもプロレタリア作家でもなく、なんとか革命の時代についていこうとする「同伴者」であったことを忘れてはならない。

それに対してスターリンにおける「人間の魂」の商品・生産物化は、人間の魂を改造・製造する作家という職業を、大砲や自動車を作る技師と同列に置こうとする（たとえそれが比喻であっても）過激なものだった。そもそも「人間の素材（＝物質）の技師」と「人間の魂の技師」を比べればはっきり分かるように、作家であるオレーシャが作家本来の領域であるはずの人間の魂から、あえて「物質」に向かおうとしたのに対して（「物質」であれば、技師のようにそれを自由に扱い、組み立てることもできる）、スターリンは工業生産物の世界を前提・基準として、その中に強引に、本来そういった世界に属するものではない人間の「魂」を組み込んでしまった。つまり物質から魂

京大学大学院人文科学研究科に提出（未公刊）、19-23 ページ。

¹⁶ *Олеша Юрий. Избранное. М.: Советский писатель, 1974. С. 227.*

に向かったのである。オレーシャとスターリンの表現は構造上似ているけれども、その志向性において正反対だった。そのこと一つを取っても、スターリンがオレーシャの言葉を「ばくった」とはと考えるににくい。

4. 社会主義リアリズムの成立と「魂の技師」

1932年のゴーリキイ邸での会合の内容は詳しく報道されることはなく、スターリンの言葉も公式にはすぐに広まることはなかった。アフォリズム蒐集家ドゥシェンコによれば、翌1933年に新聞記事でそれに言及したものがあったというが、¹⁷私は確認できていない。いずれにせよ、スターリンの言葉がほとんど「社会主義リアリズム」という用語と同じくらいソ連文学の根本方針を示すものとして広く知られるようになったのは、1934年に行われた第1回全ソ連作家同盟大会においてだった。ただし、この時はスターリン自身がそう公言したわけではない。アンドレイ・ジダーノフが演説の中で、次のように「作家は人間の魂の技師だ」を同志スターリンの言葉として伝え、その意味を詳しく説明したのである。

同志スターリンはわが国の作家たちを人間の魂の技師と呼んだ。これは何を意味するのだろうか？ この称号はわれわれにどんな義務を課すことになるのだろうか？

それは第一に、芸術的作品において生活の真実を描くことができるように、つまり、術学的に、死んだものとして、単に「客観的な現実」として描くのではなく、生活の革命的な発展のうちに現実を描くことができるように、生活をよく知るといふことだ。

その際、芸術作品の真実と歴史的具体性は労働者たちを社会主義精神において改造し、教育するという思想的課題と結びついていなければならない。芸術文学および文学批評のそういった方法こそは、われわれが社会主義リアリズムの方法と呼ぶものである。(.....) 人間の魂の技師であるということは、両足でしっかり現実の生活の土台の上に立つことだ。¹⁸

¹⁷ Душенко К. И. История знаменитых цитат. Москва: КоЛибри, 2018. С. 194.

¹⁸ Речь секретаря ЦК ВКПб А. А. Жданова // Первый всесоюзный съезд советских писателей, 1934. Стенографический отчет. М.: Художественная литература, 1934. С. 4.

これを見ても分かるように、じつは「人間の魂の技師」は「社会主義リアリズム」の概念と実質的にワンセットとして提示され、その後、いわばソ連作家の代名詞として通用するようになる。この大会では、ゴーリキイもまたジダーノフに呼応するように、スターリンの定式化に言及している——「プロレタリアの国家は何千、何万もの卓越した「文化の職人 (мастера культуры)」「魂の技師」を育てなければならない」¹⁹ (ただし、ゴーリキイの場合は「魂の技師」の前にしっかりと「文化の職人」という、いかにもゴーリキイらしく作家を職人として位置付ける言葉を入れて、微妙だがスターリンの定式化からは一定の距離を取っているようにも見える)。最初に言及したアシュキン、アシュキナ共編の『名句辞典』では「人間の魂の技師」については、「スターリンが1932年10月26日、ゴーリキイの家で行われた作家たちとの会合で、ソ連作家をそのよう呼んだ」という簡潔な説明の後に、『プラウダ』(新聞)から二点(1946年、1950年)、『ズナーミャ』(文芸誌)から一点(1964年)、用例が採られているが、いずれも肯定的な意味で使われていることがわかる。やがてこの言葉はソ連の文学観を端的に示すものとして、西側でも知られるようになった。しかし、西側でこの言葉が引用されるのは多くの場合、政治的プロパガンダの道具と化したソ連における文学のありかたを批判する意味合いでだった。例えば、J.F. ケネディは1963年10月26日に——奇しくもスターリンが初めて「魂の技師」という言葉を使ったのと同じ日付である！——アマースト・カレッジでの講演で「自由な社会において芸術は武器ではない……。芸術家は魂の技師ではない」と述べている。²⁰ さらに、チェコスロヴァキアからカナダに亡命したチェコ語作家、ヨゼフ・シュクヴォレツキーには『人間の魂の技師の物語』(1977年。チェコ語原題は Příběh inženýra lidských duší だが、英訳タイトルは「物語」を取って、*The Engineer of Human Souls* となっている)という長編小説があるが、これはカナダに亡命したチェコ人作家を主人公としたコミカルな作品で、表題にはもちろん皮肉が込められている。

5. 「魂の技師」の文学的源泉を求めて——オムリー・ロネンの研究

さて、ここでポーレフに今一度戻ると、彼が書き留めた「スターリンがオレーシャを剽窃した」とする一口話は、根も葉もないものだったのだろうか？ オレーシャはもちろん、シクロフスキーも、ポーレフも亡くなっているいまとなっては確かめよう

¹⁹ Там же. С. 18

²⁰ Robert Andrews with the assistance of Kate Hughes. *The New Penguin Dictionary of Quotations*, 2-d ed., London, 2003. (ただし Kindle 版を参照した)

がないのだが、以下のように推測できるのではないかと私は考えている。いや、推測というよりは、単なる憶測であることはお断りしておく。オレーシャはシクロフスキーともともと親しかったので、個人的に気の置けない話をする機会があっただろう（ちなみに1974年版のオレーシャ選集の序文²¹を書いて、オレーシャ再評価を力強く進めたのもシクロフスキーだった。オレーシャの斬新な「世界を見る技術」が多分にシクロフスキーの「異化」の理論の影響を受けていたのではないかということは、私自身、修士論文で論じている）。スターリンによるフォーミュラとして人口に膾炙した「人間の魂の技師」という表現について、オレーシャはスターリンの死後、ぼやき気味に「あの言葉だけどね、あれはもともと俺の言った言葉をスターリンがばくったんじゃないかと思うんだ」といった趣旨のことをシクロフスキーに（半ば冗談で、半ば本気で）言ったことがあるのではないだろうか。それを聞いてなるほどと思ったシクロフスキーが、そういえばゴリキイの家でそんなことがあったのかもしれないと思ってボーレフに話し、ボーレフがさらに尾ひれをつけて一口話に仕立てた、といったところではないだろうか？

オレーシャとスターリンについては、いまのところこの程度しか私には言えることがないのだが、私の推測するように、スターリンはオレーシャの「人間の素材」とは関係なく「魂の技師」という表現を考案したのだとしたら、その文学的源泉はどこか他にあったのだろうか、ということが今度は気になる。実際にその問題をボーレフとはかけ離れた、文学研究・文献学上の問題として博捜・精査したのがオムリー・ロネンである。この先は大部分が、博識で緻密な彼の論文²²の内容の受け売りに過ぎないのだが、非常に興味深い指摘をロネンはいくつもしているので、紹介させていただく（詳しい書誌情報は煩瑣になるので省略する。原文にあたって確かめたい向きは、ロネンの論文そのものを参照していただきたい）。ロネンはオレーシャよりも、スターリンの言葉に思想的により関係が深いものとして、アヴァンギャルド系の詩人や革命家に着目し、「芸術労働者」(работник искусства)のことを「精神-技師」(психо-инженер)、「精神-設計者」(психо-конструктор)と呼んだセルゲイ・トレチャコフや、「言葉の技師」(инженеры слова)という表現を使ったエメリヤン・ヤロスラフスキー（彼は作家ではなく、強硬な反宗教的な主張で知られる革命家・政治活動家である）などを引き合い

²¹ Виктор Шкловский, Глубокое бурение. // Юрий Олеша. Избранное. М.: Советский писатель, 1974. С. 3-10.

²² Ронен Омри, Инженеры человеческих душ: к истории изречения. // Лотмановский сборник, 2. М.: О. Г. И, 1997. С. 393-400.

に出したうえで、マヤコフスキーがロシア革命 1 周年を記念して書いた戯曲『ミステリア・ブッフ』*Мистерия-буфф*（初演 1918 年、メイエルホリドとマヤコフスキーの共同演出）に行き着く。この戯曲の第 2 幕第 16 場で、「不潔な人たち」の問いに対する「ただの人間」の答の中に、「人間の魂の熟練した組立工」（*душ человеческих искусный слесарь*）という表現が出てくるのである。

私は誰か？

私は愛書家たちの蔓のように渦巻いた

鬱蒼たる

思想の森の

木こりだ。

人間の魂の熟練した組立工だ。

玉石の心臓の石工だ。

私は水に沈まず

火に燃えない――

永遠の反逆の不屈の精神だ。²³

スターリンはマヤコフスキーの戯曲を知っていた可能性が高い。当時の読者の目には、スターリンはマヤコフスキーをもろに「剽窃」したと見えてもおかしくなかったが、もちろんそんなことは表立って誰も言えなかった（それを灰めかすように指摘していたのはチュコフスキーとシクロフスキーくらいだった、とロネンは言う）。

ここで私はどうしても、この論文の著者、オムリー・ロネン（ローマ字表記では *Omry Ronen*, 1937-2012）という、おそらく日本ではロシア文学の専門家の間でもあまり広く知られてはいない人物について、一言、思い出をさしはさむという誘惑に抗することができない。彼はオデッサ生まれのハンガリー系ユダヤ人で、ブダペストで大学教育を受けたが、1956 年のハンガリー動乱に参加した後イスラエルに逃れ、ヘブライ大学で修士号を、ハーヴァードで博士号を取得した。以後、主にヘブライ大学とミシガン大学で教鞭を執った。我々には測り知れない複雑なバックグラウンドを持つポリグ

²³ *Маяковский, В. В. Полное собрание сочинений в 13 т. Т. 2. М.: Худож. лит., 1956. С. 211.* なお、ロネンも指摘しているように、この戯曲には大幅に書き直された第 2 版（メイエルホリドおよびベプトフの演出によって 1921 年上演）があるが、こちらからは「人間の魂の組立工」という表現は削除され、引用箇所はより簡潔になっている。

ロットで、私がこれまでの人生で出会った学者たちの中でももっとも博学でチャーミングなスタイリストだ。その研究はプーシキンからナボコフまで、近代ロシアの詩と小説全般に及ぶ。著書はロシア文学の「銀の時代」、そして何よりもマンデリシュタームの詩についてのものであるが、その膨大な博識に見合った大きな著書を残さなかったという印象がある。しかし、ロネンの細部へのこだわりと文献の博搜に基づく考証のしかたには、余人の追従を許さないものがあった。彼の死後、友人や教え子たちが哀惜の念をこめてまとめた Omry Ronen, *The Joy of Recognition: Selected Essays*, Ann Arbor: Michigan Slavic Publications, 2015 に収められた論文は、一編一編が短いながらも珠玉のような著作になっている。マンデリシュタームの詩から、ナボコフの悪魔の比喩、スルツキーの「悲しみ」に至るまで。ロネンは一つ一つの言葉を宝石鑑定人のように厳密に吟味する名匠である。

私が彼に出会ったのは、たぶん 1983 年か 1984 年のことだった。私はハーヴァード大学に客員教授として来ていた彼の SF について (!) の授業に出席し、H. G. ウェルズについてアメリカ人の大学院生たちよりもよく知っていることで彼を喜ばせた。「ウェルズのような作家は英語圏よりも、ロシアや日本でよく読まれているんだよ」という彼のコメントをよく覚えている。しばらくして、オムリーはロシア文学を研究するためにわざわざアメリカに来た日本人という存在に興味を持ってくれたらしく（優れた学者はみなこういう好奇心を持っている）、まだ「平の大学院生」に過ぎなかった私と妻をディナーに招待してくれた。オムリーの奥さんも私の妻もやはり文学研究者で、その晩は四人でずいぶん話が弾んだ。おいしい手料理をご馳走されたはずだが、申し訳ないことに何を食べたか覚えていない（ハンガリー料理か、イスラエル料理がメニューに含まれていたような気がするが）。ということは、話のほうに夢中になっていたということだろう。彼らも私たちもケンブリッジに仮住まいする「越境者」どうし、同じような境遇として親近感もあった。あの頃のことをいま夢のように思い出す。

本題に戻る。オムリー・ロネンが示したように、オレーシャよりもアヴァンギャルドのほうがはるかにスターリンの言葉に思想的に近いのは、当然のことだろう。アヴァンギャルド芸術運動は、生の全面的なラディカルな変革を目指したので、魂や精神と呼ばれてきた非物質的なものも改造されるべき物質世界の一部としてとらえる傾向が強かったからだ。未来派とその周辺の詩作を探れば、もっと色々な例が見つかるのではないか。例えばすぐに思い出すのは、マヤコフスキーの詩「労働者詩人」(1918 年)である。

どちらが偉い——詩人か
それとも人々に物質的利益をもたらす
技術者か？
どちらもだ。
心臓はモーターと同じだ。
魂は精巧なエンジンと同じだ。
僕たちは対等だ。
労働大衆の同志なのだ。²⁴

この辺の事情は、ソヴィエト文学史研究者のエヴゲニー・ドブレニコが的確に説明している——「芸術の外に出て、＜全面的な美的・政治的プロジェクト＞のために生活を＜変容＞させようというアヴァンギャルドの志向は、社会主義リアリズムにおいて＜人間の魂の技師＞としての作家を、芸術の代わりに精神由来の工学を生み出すことになる」。²⁵ スターリンが「魂の技師」と宣告したときこそ、アヴァンギャルドの創り出したものが全体主義的権力によって「専有」された瞬間だった。それは、アヴァンギャルドの自由な精神に対する死刑宣告でもあった。

6. 研究は終わらない——アプローチの進化

さて、自分の研究歴に絡めながら辿ってきたスターリンの言葉の起源をめぐる探索はこれでそろそろ円環を閉じ、終わりとなりそうなものだが（ロネンの論文はわずか8ページの短いものだが、内容的にこれを超えるものは出てきそうにない）、いつまでたっても終わらないのが研究というものである。「人間の魂の技師」という表現の源泉についての文献を調べているうちに、最近、また一つ、新しい研究に突き当たった。ヴィクトリヤ・ファイビシエンコという、初めて見る名前の研究者による、「魂の技師[単数形]から魂の技師たち[複数形]へ」²⁶という論文である。ファイビシエンコの最

²⁴ *Маяковский, В. В.* Полное собрание сочинений в 13 т. Т. 2. М.: Худож. лит., 1956. С. 18.

²⁵ *Добренко, Е.* Метафора власти. Литература сталинской эпохи в историческом освещении. München, 1993, С. 27. (ただし筆者はこの本は未見。引用は次の注 26 に挙げるファイビシエンコ論文による)。

²⁶ *Файбышенко Виктория.* От инженера души к инженерам душ: история одного производства. // Новое литературное обозрение. № 152 (2018). ウェブ上で閲覧：
https://www.nlobooks.ru/magazines/novoe_literaturnoe_obozrenie/152/article/20026/

大の発見は、「魂の熟達した技師」(un ingénieur savant de l'âme)という言葉が、スターリンと何の関係もなさそうな19世紀末フランスのデカダン作家、ユイスマンスの代表作『さかしま』(1884年)で使われているということだ。この言葉が出てくる箇所を、澁澤龍彦の訳によって引用する。

ひねくれ屋で気取り屋で学者風で、しかも複雑なエロオの作品は、デ・ゼッサントの目には、その分析の透徹した理論癖によって、前世紀および今世紀の懐疑的な心理学者のある者の、気むずかしい綿密な研究を思わせた。彼の裡には、いわばカトリックのデュランティといったところがあったが、デュランティよりもっと独断的で鋭かった。いわば虫眼鏡をもった老練な実験家、魂の熟達した技師、情熱のメカニズムをしらべ、これを小さな歯車装置によって説明することを楽しむ、器用な脳髓の時計師であった。²⁷ (下線引用者)

エルネスト・エロオというのは、『さかしま』の主人公デ・ゼッサントが心酔する作家・神秘思想家で、近代科学技術や工学とは言わば正反対の方向を向いているのだが、それでいて逆説的なことに、人間の魂と情熱のメカニズムをまるで老練な技師のように分析できた、というのである。ファイビシエンコはユイスマンスがロシアでもヴァチスラフ・イワノフやベルジャーエフによって重要作家として受容され、単なるデカダン作家ではなく、「精神的な創造の新たなタイプの担い手」としての魂の実験者とみなされたと主張する。そして(この先の議論が分かりにくいのだが)モダニズム的な歴史のヴィジョンにおいて、ユイスマンスとマヤコフスキーはより深い意味で統一されるというのである。歴史というのはここでは、従来超越的で人間の手が届かなかった人間形成の源泉を「専有」することだ——というのが、ファイビシエンコの議論であり、結局ユイスマンス的な「魂の技師」も広い意味でのモダンな「主体」(subjectivity)の確立という美的・政治的プロジェクトのコンテキストの中では、ソ連における「魂の技師」をめぐる言説とつながり、ソ連的<主体>の形成までを追うことができる、ということになる。

率直なところ、「魂の技師」という言い方がそれほど特権的なもので、ユイスマンスがそれを使っていたことが決定的な発見であると言えるのか、少々疑問だし、「広いコンテキスト」ではユイスマンスもスターリンもつながることは否定できないが、コンテキストの取り方によってはたいていのものはつながってしまう。私はつい最近、

²⁷ ユイスマンス『さかしま』澁澤龍彦訳、河出書房新社(河出文庫)、2002年、214-215ページ。

やはりドゥシェンコの事典のおかげで、フランスの批評家・文学史家イポリット・テーヌもその『イギリス文学史』でシェイクスピアのことを「魂の最も並外れた製造者」(le plus extraordinaire entre tous les fabricateurs d'âmes)²⁸と呼んでいることを知ったのだが、さすがにシェイクスピアではつながらないだろうか？ フランス語の *fabricateur* は現代では普通「偽造者」「捏造者」の意味だが、古くは「製造者」とりわけ「造物主」の意味で使われたので、ここでは語彙としては作家を造物主に等しい並外れた「天才」と見なすロマン主義的なものであって、未来派からはかけ離れている。それに対してファイブシエンコ論文は使用している用語からも明らかなように、現代批評の洗礼を受けた世代によるソ連的主体論として「魂の技師」を再検討する試みであり、その意味で興味深い。

こういった最近の研究の方向の変化に関連して言うならば、私自身と私がスラヴ研究室の大学院で指導した（本当は指導などほとんどしていないと言ってもいいのだが、ここは「形式的」にそうしておく）二人のオレーシャ研究者たちのアプローチの違いにも、同様の変化が表れている。私が修士論文で試みたのはオレーシャの「創作技法」(мастерство ないしは広義の поэтика)の研究であり、フォルマリズム的なテキストへのアプローチが前面に出ていた（ただし私の場合それだけではなく、他方では社会と作家の緊張関係にも常に注意を向けていたので、折衷的だったと言えるだろう）。いや、当時の私はせいぜいシクロフスキーの「異化」という概念を知っていたくらいで、フォルマリズムなどというカッコいい「方法」を使おうという意識はほとんどなかった。単にオレーシャのテキストをロシア語としてきちんと読んで理解し、その特徴を捉えることで精一杯だったのだ。しかし、今にして思えば、これはその後の日本におけるオレーシャ研究の展開のためには必要な基礎作業だった。

ここで思い出話をもう一つだけ付け加えると、私の修士論文の中でも一番自信があった比喩論の部分を一編のロシア語論文にまとめて、『ロシア文学 1920年代』創刊号（1981年4月刊）に掲載したところ、²⁹予想もしなかったのだが、ニューヨークで

²⁸ Hippolyte Taine, *Histoire de la littérature anglaise*, vol. 2, 6th edition, Paris: Librairie Hachette et Compagnie, 1886, p. 193.

²⁹ 私の他に坂倉千鶴、西中村浩、安岡治子といった東大スラヴの同世代の大学院生が中心になって発行した研究同人誌（私家版）。創刊号にはその他、他大学からの参加者として、谷垣恵子、寺尾優羅、松原明が寄稿している。この雑誌は世に言う「三号雑誌」にすら届かず、

刊行されている老舗の亡命ロシア文芸誌『ノーヴィ・ジュルナル』にそのまま転載された。³⁰これはオレーシャの比喩だけをことさら取り上げて論じたもので、亡命ロシア人文学研究者ロスチスラフ・プレトニョフ（1903 年生まれ）の強い反発を買い、彼の手厳しい批判が次の号に早速掲載された——「いかにオレーシャのいくつかの比喩が素晴らしいものであっても、それだけで才能ある重要な作家と呼ばれることにはならない。文学作品の構造には必ず、構成や理念、主題、モチーフなどが入ってくるものだ。比喩が作家や詩人の芸術の基礎をなすことはない」といった調子のものである（Новый журнал. 1982. № 146. С. 270）。なにしろ私の論文は副題が「比喩における彼の人生」となっていて、作家の本当の人生は作家の書いたものの中にしかない、といった奇矯な主張を冒頭に掲げているくらいだから、旧世代の保守的なロシア人には通じないのもしかたないことだった。その一方で自分の論文がこういう形でロシア人の「プロ」の文学者に相手にされたのは嬉しくもあった。対照的だったのは英語圏での反応で、英語で出たオレーシャの『羨望』に関する批評・研究アンソロジーの巻末に掲載されたビブリオグラフィーで、私の論文は編者に“Best article on Olesha’s metaphors”³¹と褒められた。

その後、東大のスラヴ語スラヴ文学研究室で教えるようになった時、最初の博士課程院生が岩本和久氏である。彼の博士論文「脆弱な《私》の肖像—オレーシャの作品にみる自己愛と同一化」（1996 年）は、精神分析や現代の様々な批評理論を援用しながら広い意味での「テマテスム」（テーマ批評）の方向にオレーシャ研究を導くものだった。岩本氏はさらにオレーシャ研究をたゆむことなく続け、ロシアでのアーカイヴ調査も踏まえて、冒頭で引用した日本で初めてのオレーシャに関するモノグラフ『沈黙と夢—作家オレーシャのソヴィエト文学』を上梓した。ここでは革命後ソ連社会におけるオレーシャの位置づけや、アヴァンギャルド芸術から社会主義リアリズムへという歴史的展開を強く意識しながらも、オレーシャにおける異化の手法、「家」の主題、エディプス的なイメージと無意識、回想への志向といったテーマが掘り下げられてい

1983 年 2 月に第 2 号を出してそのまま廃刊となった。私自身は第 1 号では編集の中心を担ったが、1981 年 9 月からハーヴァードに留学しそれ以来 4 年間日本を離れたため、第 2 号には参加できなかった。

³⁰ Мицүёси Нумано. Судьба искусства Юрия Олеши: его жизнь в метафорах // Новый журнал. 1981. № 145. С. 59-76.

³¹ Rimgaila Salys, ed., *Olesha’s Envy: A Critical Companion*, Northwestern University Press, 1999, p.146.

る。

さらに私の在職の最後の時期になって、もう一人のオレーシャ研究者が現れた。古宮路子氏である。古宮氏の博士論文「オレーシャ『羨望』草稿研究」(2017年)は、同氏がアーカイブの草稿調査に基づいて書き上げモスクワ大学に提出したカンディダート論文を踏まえたもので、それまで日本のロシア文学研究者がほとんど手を出さなかった、草稿を用いた本格的な「生成研究」になっている。オレーシャのアーカイブ資料調査は、前述の通り岩本氏が既にある程度行って先駆的だったが、草稿研究を前面に打ち出したのは古宮氏が初めてである。ちなみに未公開のアーカイブ資料を用いることは日本のロシア研究界でも、歴史の分野ではすでに相当前から常識となっており、アーカイブ調査なしに博士論文を書くことはおそらく不可能だが、文学研究はそれに比べるとずっと遅れていたのである。私もこの齢になるまで、アーカイブ調査は何度か真似事を試みたものの、恥ずかしながら本格的にやったことがないまま来てしまった(そういう世代なのだ)。退職後、時間ができたら、モスクワのРГАЛИなどでいまだに未公開のままになっているチェーホフ関係資料、ニューヨークの Berg Collection でナボコフ関係資料、そしてクラクフでスタニスワフ・レムの個人アーカイブなどを調べてみたいと思っではいる。それぞれについて書きたいテーマはあるのだが、自分に残された僅かな時間を考えると、実際に実を結ぶかどうかは自信がない。

40年間、三代にわたるオレーシャ研究の変遷を振り返って見ると、「何を書くにしてもすべて日本では初めてのことばかり」といった私の時代より研究水準全般が高くなってきたのはもちろんだが、むしろ研究そのものの方法、テキストへのアプローチが鮮やかに変化し、進化してきたことに注目すべきだろう。この文章を書きながら、私はその道のりを思い起こすとともに、また終わりから初めに帰ってすべてを最初の新鮮さのうちにやり直したいという衝動に駆られる。

これをもって26年間務めたスラヴ語スラヴ文学研究室を去るにあたっての挨拶としたい。なおこのような、学術論文と個人的なエッセイの間を気ままに行き来する「ゆるい」スタイルは、この間に私がたどり着いた境地である。文学について書くことは、自由で喜ばしいものでなければならない——オレーシャが最も優れた作家であった時期の作品のように。ただし若い皆さんは真似をしないように。こんな文章では「業績」にカウントされないからだ。

Olesha and Stalin: On the Origin of “the Engineers of Human Souls”

Mitsuyoshi Numano

Thanks to Kornelii Zelinsky’s meticulous memoirs (published posthumously in *Minuvshee*, 1990, No. 10, and *Voprosy literatury*, 1991, No.5) we know that Stalin first used the famous expression (which later became a “krylatoe slovo”) “Engineers of Human Souls” as a definition of the Soviet writers at the meetings with leading Soviet writers and critics held at Gorky’s house on 26 October 1932. But now, in the Internet, quite another version seems widespread: it is Olesha who first coined the expression and then Stalin “plagiarized” it. I found that it is due to the literary anecdote which Yuri Borev recorded based on what he heard from Viktor Shklovsky in 1971. This episode was included in Borev’s collection of Stalin folklore *Staliniada* (1990) and later misled many people who took it for its face value.

What Olesha offered as a definition of the task of the writer in the Soviet age was “an engineer of human material.” By comparing Olesha’s short story “The Human Material” (1929) and Zelinsky’s memoirs, I came to the conclusion that, although the formulas of Olesha and Stalin are similar in their phrasing, they are quite different in content and it is not probable that Stalin should have borrowed the formula from Olesha.

I agree with Omry Ronen who demonstrated, by exploring extensively the avant-garde context which prepared Stalin’s expression, that it is rather Mayakovsky’s *Mystery-Bouffe* that was “plagiarized” by Stalin. In the end of my essay I also added one more new finding by Viktoriya Faibyshenko, who discovered that the French “decadent” writer Huysmans used a similar expression “un ingénieur savant de l’âme in his novel *À rebours*. I found Faibyshenko’s argument rather far-fetched, but quite stimulating, that Huysmans’ formula comes into the broader historical context of aesthetic and political “projects” that eventually lead to the Soviet subjectivity expressed by the formula of the “engineers of human souls.”